院内デイケア「そうび」の活動報告

藤井悠希　與大輔　大紺麻里

大阪府済生会中津病院　看護部

抄録

【目的】高齢患者に対する入院中の活動低下による認知症症状悪化等の予防を目的として院内デイケアを立ち上げた。【方法】認知症や高次脳機能障害，身体拘束中の患者を中心に選出。2週間に一回実施した。【結果】前年度と比較して，ひと月あたり約8名増加，9ヶ月間で延べ126名の患者に実施できた。【結論】身体拘束の低減が図れる事で，患者の尊厳の保持や自立支援にも繋がった。活動継続には多職種の協力が必要不可欠である。

Key word：院内デイケア　身体拘束　レクリエーション

背景と目的

高齢患者に対する入院中の活動低下による認知症症状悪化等の予防を目的として，2017年に介護福祉士が中心となり院内デイケアを立ち上げた。その後，コロナ禍の休止期間を経て集合型から個別訪問型（表1）へと開催方法を変更し2024年1月に活動を再開した。

認知症ケアサポートチーム（以下DST）が介入している患者の中から対象者を選定し，介護福祉士が所属している6病棟から対象患者の多い3病棟で実施。

2024年診療報酬改定により身体拘束最小化に向けた取り組みが強化された背景からも，院内デイケアの対象患者を拡大する意義があると考えた。

活動内容

対象患者の選定は認知症や高次脳機能障害，身体拘束中の患者を中心に，DSTチームとともに選出し，病棟看護師との話し合いにて当日の患者状態や安全性についての確認を行った。

活動を担う介護福祉士は1日2名から3名へ増員し，対象病棟は3病棟から4病棟へと拡大し2週間に一回の実施を継続。コロナ禍の規制緩和に伴いイベントとして夏祭りなどの集合型レクも開催した。（レクリエーションの様子やプログラムの一例は表2・表3を参照）

身体拘束中の患者は院内デイケア対象外であったが今年度より対象とした。身体拘束中の患者は院内デイケア中に拘束を解除し，危険行動の有無や身体拘束解除時間等の情報を患者の反応も含めて身体的拘束チェックリスト（表4）へ記載できるように病棟看護師など多職種との情報共有を図った。

結　果

患者の多くから「楽しかった」「また参加したい」等のよい反応が聞かれた。院内デイケア対象患者数は前年度と比較して，ひと月あたり約8名増加，9ヶ月間で延べ126名の患者に実施する事ができた。うち6名は身体拘束中の患者で，30分の院内デイケア介入時間の内，一人あたり約25分程度解除する事ができた。その際チューブ抜去等のトラブルの発生はなかった。

考　察

院内デイケアへの参加を通じて，患者にとって快の刺激を与えながら活動性を向上させる事ができたと考える。また，DSTや病棟看護師と連携を図る事で専門的な視点からの患者アセスメントができ，患者の安全を担保しながら効果的に院内デイケアを拡充する事ができた。身体拘束中の患者にとっては一時解除の検討の機会や，身体拘束の低減が図れる事で，患者の尊

受付け：令和8年2月27日

厳の保持や自立支援にも繋がったと考える。

結　論

急性期病院における院内デイケア活動の拡充に向けて，活動に携わるスタッフの確保や看護師を始めとする多職種の協力は必要不可欠である。院内デイ活動の意義・目的を多職種間で共有しながら，患者にとってより望ましいケアを提供していきたい。

今後の課題

DSTチームが介入していない患者も参加できるように患者選定時に病棟患者推薦枠を設け，さらなる対象患者拡大に向けて動いていく為に，看護師を始め多職種と連携していく必要がある。



表１　訪問型レクリエーションの様子



表２　集合型レクリエーションの様子（左：夏祭り，右：秋獲祭）

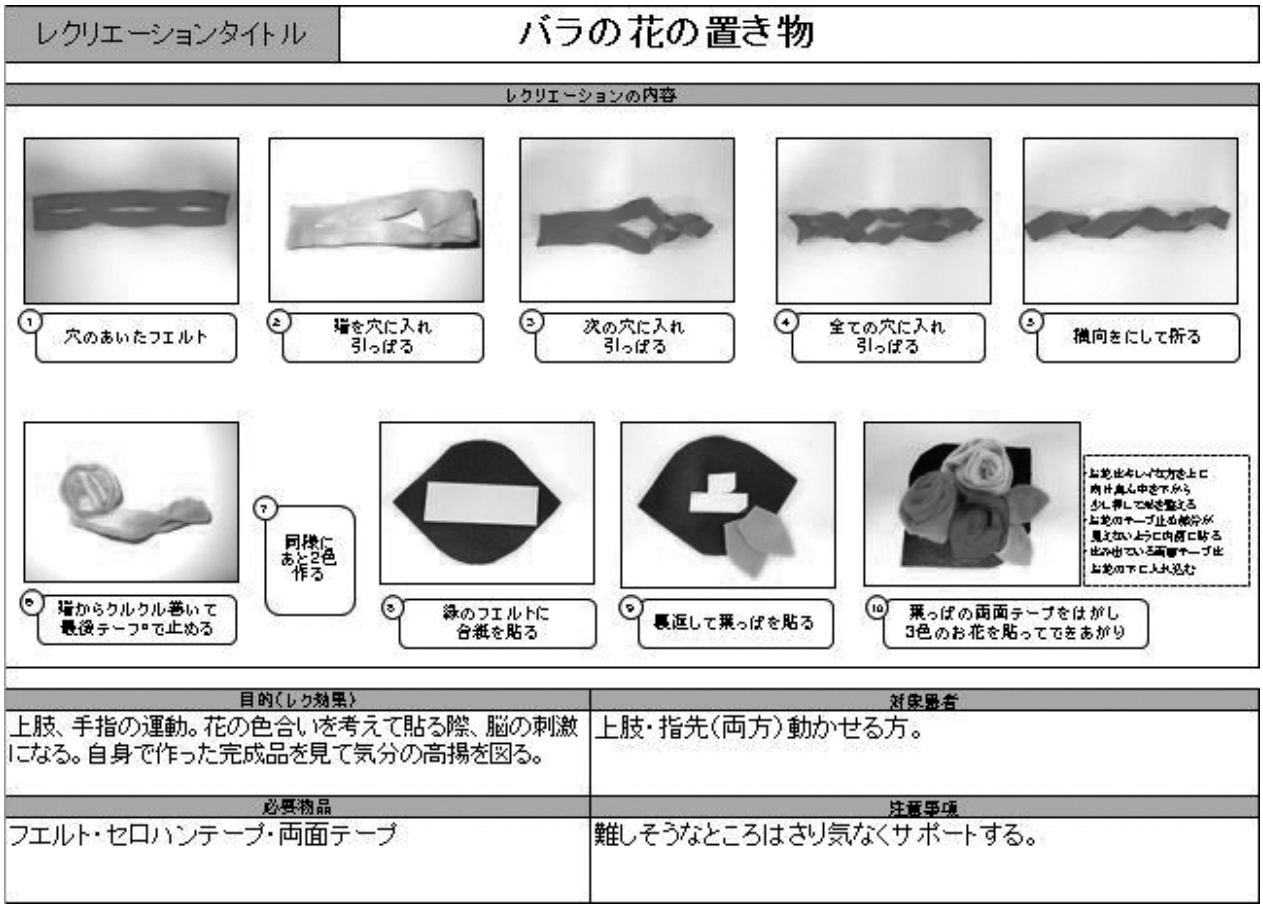


表３　レクリエーションプログラムの一例

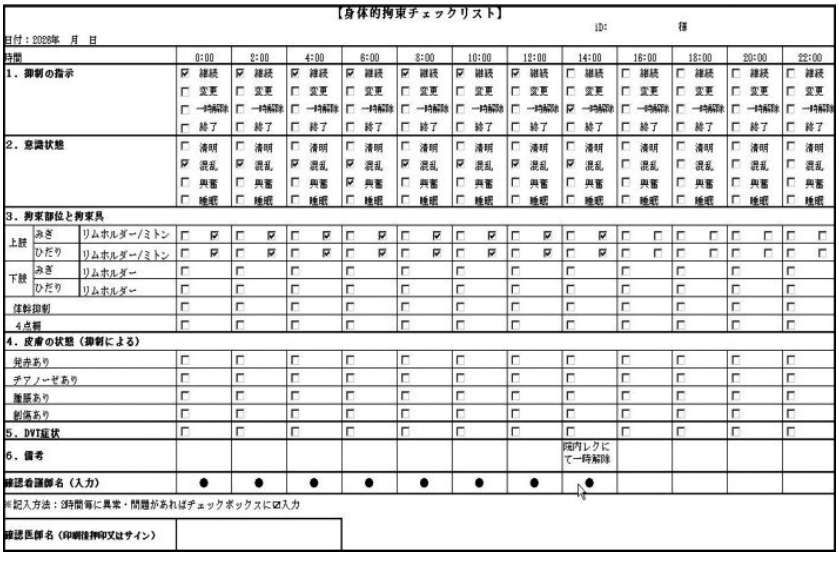


表４　身体的拘束チェックリスト